

キルデさんの臨死体験（人生学 第12回）

高橋清隆

Ms.Kilde's Near-death Experience

Kiyotaka Takahashi

はじめに

立花隆さんの『臨死体験』（文藝春秋、上下巻とも1994年9月20日、初出は『文藝春秋』1991年8月号～1994年4月号）は、私がこのような研究をするきっかけとなった本ですが、何度読んでも様々な発見があります。

それは立花隆さんが自分の考え方を書いたところよりも、取材した相手の言葉の中に多く見られます。けなしているのではありません。立花隆さんがこの本を執筆した意図も、自分の考えを述べることより、臨死体験をした人たちへの取材を、あまり私見を交えずに紹介するところにあるからです。そのため、宗教的・政治的に偏ることなく、この種の本にしては珍しく、あの世や生まれ変わりがあるという立場に固執しているわけでもありません。

私は学生時代に、宮城音弥さんの『神秘の世界』（岩波新書、1961年11月）に出会い、そういう本が岩波新書から出ていることに驚きましたが、それ以来、久しぶりに、あの世のことに批判的ではない、冷静な立場の本に出会ったと思ったものでした。

1 医師キルデさんの臨死体験

さて、今回は、『臨死体験』の中から、フィンランドの女性医師キルデさんの体験を取り上げてみたいと思います。キルデさんは、自分の臨死体験を書いた『死は存在しない』がベストセラーになり、欧米では有名な人であるということです。その臨死体験について引用します。

キルデさんの体験は、一九六九年、医学校を卒業して医者になったばかりの年に起きた。急性腹膜炎で、救急病院に担ぎ込まれ、緊急手術を受けたときのことである。

「そのとき私は、全身麻酔をかけられて意識喪失状態にあったわけです。しかし、突然気がついてみると、私は天井のあたりに浮かんでいて、自分が手術されるところを見ていました。そして不思議なことには、手術をしている医者の考えが読めたのです。これからメスを取って、切ろうとしているなというのがわかりました。彼が切ろうとしているところには小さな動脈がかくれているということもなぜか私にはわかりました。しかし彼はそれに気がついていない。だからその動脈が切られてしまうというのがわかったのです。私はそれを止めようとしてあわてて叫びました。『そこ

を切っちゃダメ！そこには動脈があるのよ！』。しかし、彼には私の声が聞こえません。私が予知した通り、彼は動脈を切ってしまいました。血がパァーと噴き上がり、天井近くまで達するのが見えました。その途端、私はトンネルの中に吸い込まれていきました。トンネルの中は真っ暗で何もありませんでした。その向こうに輝く光があり、そこに私は入っていきました。それは自由の女神像くらい巨大で強く光り輝いていました。光は暖かく、愛に満ちていました。輝き方があまりに強かったので、私は光を直接みることが出来ませんでした。私は思わずその前にひざまずいてしまいました」
(149～150 ページ)

このような臨死体験は比較的好く見られるものであり、今回は、臨死体験の状況については触れません。また、立花隆さんのこのインタビューの後にキルデさんが行った記念講演では、この引用部分の「自由の女神像くらい巨大で」というくだりは、具体的にキリスト像と表現されていました。立花隆さんは、これについて、「キルデさんは、私に話すときには、キリストという固有名詞を持ち出すのをわざと避けていた。こういう表現を避けたのは、東洋人の私に、あまり宗教色の濃いイメージを与えるのはよくないと思ったからかもしれない。(中略)彼女がこういう表現をしたからといって、彼女が特に宗教的な人間であるというわけではない。もともとそうでなかったし、体験後もそうではない。むしろ体験後は、キリスト教も含め、既成の宗教からは離れてしまうのである」(151 ページ)としています。

これは興味深い問題ではありますが、今回は、臨死体験そのものと宗教の問題には立ち入らないことにします。

2 人生の意義に関わる言葉

今回、いちばん取り上げたいのは、以下に引用する部分です。

「それから私は声を聞きました。私を教え、さとすような声でした」

——それは外から物理的な音声として聞こえてきたんですか。

「いえ、それはテレパシーのように、自分の内部から聞こえてきました——」

——で、その声は何をいったんですか。

「医者になるなんてことは大したことじゃないといったんです。私はそのとき医者になったばかりで、医者になったということを自分でもとても誇りに思っていたので、そんな風にいわれたのはショックでした。次にふり向けといわれました」

——ふり向け？

「ええ、それでいわれた通りにふり向くと、そこは海で、水底には、何千何万という真珠がびっしりと敷きつめられていました。白い美しい真珠でした。そこに再び声が聞こえてきて、その真珠は人間の魂を象徴しているのだと教えてくれました。そこへ波が寄せては返していました。ときどき

大きな波がくると、真珠は少し陸のほうに押し上げられていきます。それを見て私は、日常の波ではなくて大きな波にときどき出会うことによって、その意識レベルが高いところに引き上げられていくのだという悟りを与えられました。そのとき、遠くのほうに黒真珠が一つあるのに気がつきました。それを見たとき、それは私の夫の魂であるとわかりました。そして再び教える声が聞こえてきて、私たちは離婚することになるだろうと告げました。まさかと思いました。そんなことがあるはずがないと思いました。そのころ私たちは結婚して間もないころで、二人ともとても幸せなころだったのです」

——で、予言は実現したんですか。

「ええ。その体験の三年後なんですが、本当に離婚しました」（152～153ページ）

初めてこの部分を読んだ時、「医者になるなんてことは大したことじゃない」というところに大変驚きました。この部分に関しては、立花隆さんはコメントしていません。

医者になるためには、通常、かなりの勉強をすることになります。近代的な国で医者になろうとすると、優秀な上に努力も必要とされます。キルデさんも、「医者になるなんてことは大したことじゃない」と言われて、自分がしてきた努力にケチをつけられたように感じたのではないのでしょうか。

3 努力は無駄なのか

必死に勉強してきてやっと医者になったばかりのところ、「医者になるなんてことは大したことじゃない」と言われて気分の良い人はあまりいないと思います。怒る人も少なくないのではないのでしょうか。これが、実際の人間に言われたら穏やかではないでしょう。

ところが、それを、自分の内部から聞こえてきた、教え、さとするような声から言われたのでは、とまどうばかりです。

しかし、人生学の論考の第4回で述べたように、私たちは、自分の人生のプログラムをだいたい決めてきているようなのです。だから、スポーツ選手が、結果にこだわりたい、ということ言うのは、あまり実のあることではありません。もちろん、ファン向けの言葉で、結果はどうでも良いと言うわけにはいかないし、自分の心構えとしても、初めから負けるつもりで試合に臨むのは、学びの点から言っても望ましくはありません。一生懸命練習してきて、試合でも自分の力を出し惜しみせずにプレーすれば、負けても学ぶことは多いでしょう。結果は自分で決めてきてはいるのですが、その過程を、どのように思い、どのように生きて行くかこそが、私たちが自分に課した学びであると言えるでしょう。

医者になるためにがんばって勉強したことは無駄ではありません。生まれる前に決めてきていたとはいえ、手を抜けば、医者になれなかった可能性もあったのです。医者を選択しない自由もあります。

むしろ、結果や才能に対して、自慢しない方が良く、自分は他人より優れた人間だと思わない方

が良いということの方が大切だと思われます。つまり、結果や才能は、本人が優れているからではなく、生まれる前にそのように設定してきてただけのことなのです。

それを、自分が優れているためだと思うのは大きな誤りです。世間的な成功者の秘訣などというのはありません。あるとすれば、生まれる前にどのように決めてきたかだけです。お金持ちになるのも、有名人になるのも、希望の会社や大学に入るのも、容姿が良いのも、頭が良いのも、すべて自分で決めてきていることなのであって、本人が偉いからではありません。

私たちは、どんな境遇でも、その境遇の中で、どのように自分を磨き、どのように他の人にあたたくするかということが、生きる主眼だと言えるでしょう。

それでも、お金持ちがうらやましい、有名人がうらやましい、美男美女がうらやましい、高学歴がうらやましい、運動能力が優れているのがうらやましい、と思う人は少なくないかもしれません。

しかし、自分のできることを精一杯しなかった、というのは、死後、犯罪の次に後悔する材料となることは、これまでの人生学で述べたとおりです。

それを考えれば、たくさん才能や富を持って来た人は、むしろ、それだけ大変だということも言えると思います。

医者になれるほどの才能に恵まれた人は、それを誇るのではなく、それを、人のためにどうやって使うのかということがいちばんの課題なのだと思います。

医者になれてうれしい、という気持ちは大切だと思いますが、誇ってはいけないと、自分の内部から、きついひと言があったのは、キルデさんにとって、貴重な戒めだったようです。

4 離婚は失敗ではない

以前、テレビを見ていたら、芸能人が悩みを告白する番組で、ある女優さんが、離婚したことで過度に自分を責めている場面がありました。

しかし、キルデさんの先の引用の後半部分は、驚くべき内容でした。

波と真珠の例えは、美しくもあり、少し悲しくもありました。それは、学びの様相を端的にあらわしているようです。

そして、それに続いて、夫の魂をあらわす黒真珠が見え、教える声が、「私たちは離婚することになるだろう」と告げたのです。それは実現してしまうのですが、確かに、立花隆さんが考察しているように、そのようなことが心の奥底にあり、仲が良かった時にもかかわらず暗示を受けてしまったために、離婚の運命などなかったにもかかわらず、離婚してしまったということもあるかもしれません。

けれども、ここはやはり、生まれる前の会議で、離婚することに決めていたのだと思います。それによって、キルデさんは多くのことを学んだのです。

好きな相手と生活を共にすることというのは、誰でもあこがれるものだと思います。しかし、それがうまく行くとはい限らないことは、世の中を見ればわかることです。皮肉を言っているのではあ

りません。

いやいやさせられたわけではなく、自分の意志で恋愛して結婚したはずなのに、その相手とうまくいかなくなるのは、辛く悲しいことだと思います。それでも、夫婦それぞれ相手を非難しているだけでは問題は解決しません。自分と向き合わざるを得なくなるでしょう。そこから自分の人生の課題が見えてくることが多いのです。結婚というのは、互いを磨き合う良い機会です。離婚にしても、紙一枚提出しておしまいということはありません。賠償等がない場合でも、何をどのように分けるか、他の家族、特に子供をどうするかについて、いやになった相手と話し合うことになるのです。嫌いな人は無視してすませる、というわけには行かないことも少なくありません。気に入らない相手とどのように関わって行くかというのは、多くの人にとって、人生の主要な課題になっているようです。時には大きくもめることもあるかもしれませんが、それこそ、大きな波は、私たちのレベルを引き上げることになるのです。

5 時間と空間と物質と

——その声から告げられたことが他にも何かありますか。

「お前には、まだこの世で果たすべき使命があるというようなことを告げられましたが、具体的にどういう使命なのかは告げられませんでした。（後略）」
(157 ページ)

これは、臨死体験でしばしば報告される情景です。よくあるのが、おまえはまだ、こちらに来るべきではないから帰るなさい、と言われて戻って来るという体験です。

特別良いことをしたからご褒美として寿命が延びたという例も少しはあるのですが、むしろ、まだやることが残っているから戻るように言われた例の方が多いようです。その場合、具体的に何々をやりなさいと言われることはほとんどありません。それは命令されてすることではなく、あくまでも自分の学びの課題です。自分で見つけるのもまた学びのうちです。

さて、ここで注目したいのは、次の部分です。

——この体験は、時間的にはどのくらい持続していたんですか。体外離脱、トンネル、光、真珠の場面など、それぞれどれくらいつづいたんですか。

「体験中は時間の感覚というのが全然ありません。長時間でもなく、短時間でもない。要するに時間というものがないんです」

——すると、永遠の中にいるという感じ？

「永遠というか、永遠に今が続いているというか。とにかく時間という次元がないんです。時間という概念が消えてなくなってしまう。ですから、時間というのは、人間が作ったものなのではないかという気がしました」
(158 ページ)

この世に生きている私たちは、時間と空間は厳然としてあって、物質もいちいち論証するまでもなく存在しているのではないかと思ってしまうのですが、この世から旅立ってみると、時間や空間がある世界の方が異質とされるようです。時間と空間は、学びのために用意された虚構と言えるのかもしれません。また、物質についても、肉体から離れると、私たちの本体は、建物を通り過ぎたり、壁の向こうが透けて見えるようになったりもするため、私たちがいただいているような物質の観念は幻想のようです。キルデさんの「時間というのは、人間が作ったものなのではないかという気がしました」というのは、的確な洞察のように思われます。

——体験中の意識のほうはどうなんですか。正常に、鮮明に保たれているんですか。

「完全に鮮明です。思考も感性もいまこうしているのと同じようにクリアです。こんな風に考えてくればいいのです。いま着ている服を脱いで、裸になったとしますね。意識レベルに異常をきたしますか。服を脱ぐ前と後で意識は何も変わらないでしょう。それと同じことです。肉体というのは、我々がこの世で着用している衣服のようなものです。それを脱いだからといって意識がおかしくなるということはありません。かえって気持ちがよくなるくらいです」

——その体験を医者以外の人にも話しましたか。

「主人にも、両親にも、友人にも、親しい人にはみんな話しました。しかし、誰一人として真面目に受け取ってくれませんでした。よし、よし、大丈夫、心配しないでといった、病人をいたわるような言葉をかけてくれただけです。病気で私が精神に異常をきたしたと思っているのが明らかでした。私の精神は百パーセント正常で、この体験は私の人生に起きた最も大切なことなんだということを一生懸命伝えようとしたのですが、ダメでした」

——ご自分ではこの体験をどう解釈していたんですか。その頃、臨死体験に関する予備知識は何か持っていましたか。

「予備知識なんて全くありません。だいたいそのころ、臨死体験について書かれた文献なんて何もなかったし、臨死体験ということばすらなかったんです。ヨーロッパで臨死体験が広く知られるようになったのは、アメリカのムーディ博士の本が翻訳されてからなんです。あれが出たのが一九七五年です。一九六九年ころといたら、誰も何も知らなかったんですか。だから、私の頭がおかしくなったと皆に思われても仕方がないところでした」 (158～159 ページ)

ここでは、臨死体験が認知されていなかった時代の辛さが述べられています。

今でこそ、臨死体験は、信じるか信じないかはともかく、それを語る人はどうかしている人と思うことは少なくなってきたと思いますが、一九七〇年代以前では、変人奇人扱いされることも少なくなかったようです。

そしてここでもキルデさんの言っていることは的確です。肉体と本体（エネルギー体）との関係を、衣服と肉体に例えています。まさにそのとおりです。衣服はあくまでも衣服でしかありませ

ん。

私たちの本体（エネルギー体）は、オーラが見える人以外には見えないものですが、それもまた、この世の、時間・空間・物質の虚構性をあらわしているのかもしれない。

6 体外離脱

キルデさんは、その後、臨死体験の実験を、自らの体を使ってやってみました。それが体外離脱という方法でした。自己催眠を用いて肉体から抜け、肉体の外から自分の体を診察してみると、脈拍や呼吸が極端に少なくなっていて怖くなり、「お母さん、助けて！」と叫んでしまったら、一瞬のうちに、千キロも離れたヘルシンキの両親が住む家の居間に飛んでいたという記述があります。もちろん、肉体はラップランドの自宅にいて、本体としてのエネルギー体だけが、ヘルシンキに行ったので、両親は気づきませんでした。もっとも、犬や猫がいたら、気づかれたかもしれませんが。

「居間には、私の母と姪がいました。私の姉の五歳になる子供です。彼女は床に座り込んで絵を描いていました。母は花模様のロングドレスを手縫いで仕上げていました。どうやら母が姉から子供を預かって面倒を見ている様子でした。姉はどこにいったのかしらと思ったとたん、またポンと場面が変わって、きらびやかなカクテルバーで、姉が男の人と楽しそうにおしゃべりしているところが見えました。姉さんのご主人はと思って見回しても見当たりませんでした。そういう場面を見ていてもつまらないので、もう自分の家に帰りたと思ったとたん、またポンと場面が変わって、千キロ離れたラップランドの自宅に戻り、ベッドの上の自分の肉体のあたりをただよっていました」

(172 ページ)

これを見ると、時間・空間というのは、虚構だということが理解できると思います。肉体を伴わなければ、何万光年離れた場所へでも一瞬で行けるのです。

そして、キルデさんは、ロングドレスの模様や、カクテルバーの店の名や、姉が飲んでいた相手の男性の名前まで当てています。うすぼんやりとした感覚ではなく、そのような細かいところまで知覚しているのです。

自分の目に見えるものしか信じないという人がいますが、肉体の目で見ている物というのは、実は、物事のほんの一部なのです。

7 自動書記

キルデさんは「ラップランド地方というのは、昔からシャーマンがいたところなんです。今はほとんどいなくなりましたが、昔は、みんなシャーマンのところに行って病気を治してもらったり、行動の指針となるお告げを聞かせてもらったりしていました」(176 ページ) と言っています。

現在の日本でも、恐山のイタコや、沖縄のユタなど、そうした存在は、けっこう世界のあちこちに存在していたようです。その中には、ある程度の能力を持った人もいたでしょうし、霊的な能力はなくても、現代で言えば、カウンセリングの能力に長けていた人もいて、機能していたのだと思われれます。

それはともかく、キルデさんは、そうした背景も手伝ってか、次のように、さらに一步踏み出します。

——結局、この体外離脱の実験に成功したことで、さっきいていた、肉体と三次元の世界より、エネルギー体と四次元の世界のほうがより本質的な存在なのだという認識を持つようになったということなんですか。

「いえ、それだけじゃないんです。それにはもう少し別の話があるんです。体外離脱の実験をしてからしばらくして、私はロヤニエミにあったある小さな瞑想グループに入ったのです。このグループは瞑想によってサイキックパワーを高めることを目的として、毎週一回集まって瞑想をしていました」
(177 ページ)

そこで三年たったとき、ソルヴェーグという存在があらわれます。

——ソルヴェーグというのは何ですか。

「男の人の名前です。それは私の従兄の名前でした。その二カ月前に心筋梗塞で五十一歳で死んだばかりでした。彼は医学博士で医学大学の教授でしたが、オカルトに興味を持ち、輪廻転生なども信じていました。そういう話を私が小さいころから聞かせてくれていたのですが、私はあんまりそういうことを信じないほうでした」

——それがチャネリングによって本当に出現してきた。

「そうなんです。半信半疑のまま、次の瞑想集会のとき、今度はペンと紙を持って出かけました。また従兄が出てきたら、今度は紙に書いてもらおうと思ったのです」

——出てきた？

「出てきました。再び自分の名前を聞き、今度は、『私は生きている』と書いたのです」

——ほんとですか。

「私も信じられぬ思いでした。訳がわかりませんでした。死んだのに、『生きている』なんて。しかし、とにかく、止めようがない力で、自動書記現象が起きてしまうのです。仕方がないから、私はソルヴェーグにいいました。声に出していったわけではありません。心の中でいっただけです。いいわ、もう、あなたが生きて、私にコミュニケーションしたいのだということを確認するわ。伝えたいことを何でもいいから書いて。私が伝達役をしてあげる、と。すると、手が猛烈なスピードで動いて、自動書記をはじめました」

——ソルヴェーグは何を伝えたかったんですか。

「それは一九七九年のことだったんですが、『一九八一年にお前は本を書くことになる。それはベストセラーになり、世界各国で翻訳されるようになるだろう』というのです。そんなことはとても信じられないことでした。私には文章を書く力がないし、だいたいフィンランド語の本で、よその国の言葉に翻訳された本なんてこれまでなかったんです」

——しかし、本当に二年後に本を書いて、ベストセラーになり、世界各国で翻訳されることになってしまったわけですね。 (178～180 ページ)

キルデさんの自動書記については、次のように述べられます。

「(前略) 自分では何を書いているかわからないんです。あるときは、真っ暗闇で書いたこともあります。そのときは、真夜中に『書け』という命令がきて、眠いからいやだといったんですが、『どうしても書け』という。仕方がないので起き上がって、スタンドのスイッチをひねったら『そんなものは必要ない。どうせお前が書くんじゃないのだから消せ』というんです。それで本当に真っ暗闇で書いたんですが、翌朝起きて見たら、本当にきれいにかけてるんでびっくりしました。しかもその字体が、十九世紀に流行った古風なきれいな書体なんですね。正常なときに、その書体で書けといわれても書けないような書体でした。不思議だなと思っていたら、私の母がいうには、それは私の祖母の書体にそっくりだということでした」 (180 ページ)

この話になると、抵抗がある人が少なくないと思います。いわゆるこっくりさんを私は勧めません。害があることが多いからです。私の知人が、このような瞑想グループに入りたいと言ったら、私は、入らない方がいい、と言うと思います。

けれども、こうした能力を持つ人は、このような霊的能力を開発するような出来事を人生に組み込んで生まれてくることもまた事実です。大多数の人は、そうしたいいわゆるオカルト的な方法ではなく、日常的なことをこなしていく中で、成長していくというカリキュラムを選択するのですが、キルデさんの場合は、一般の人とは少し違う役割を自分に課して生まれてきたようです。

臨死体験の分野で先駆的役割を果たしたエリザベス・キューブラー・ロスさんも、途中、オカルト的な分野に足を踏み入れたことがあるようですが、臨死体験があまり認知されていなかった頃に、その体験を語るのは、オカルト的な人、理屈が通じない人、あるいは、カルト宗教にはまっている人と誤解されることになりかねません。そのような中、キルデさんはそうした困難な道に踏み込んで行ったのでした。

上記の文章を読むと、ソルヴェーグという亡くなった従兄に操られているように見えるかもしれませんが、結局は、自動書記をすることも、生まれる前から自分で計画してきたことなのでしょう。

8 大きな流れの中で

生まれる前に自分の人生を決めてきていると言うと、人生の筋書きは決まっているのか、という人が必ずいます。決まっているのではなく、学びのために自分で決めて来ているのです。「明日のことまで思い悩むな」という聖書中の言葉の本当の意味は、人生のカリキュラムは自分で決めてきているのだから、時間割どおりに授業を受ければ良いということであり、次の時間がどんな授業か悩むより、今、目の前の授業を集中して受けなさいということです。

結果はほとんど決めてきています。

だから、結果をいばるのは愚かしいことです。「医者になるなんてことは大したことじゃない」と言われれば不愉快かもしれませんが、そうした気持ちを持つことは大切です。

また、離婚したからといって、自分や相手を責めるのも、同様にあまり生産的なことではありません。離婚の原因をあれこれ探るよりは、離婚によって、どのようなことを学んだかに目を向けることの方が大切です。

大きな波は、集中講義のようなものでしょうか。

しかし、キルデさんへの取材の文章には記されていませんが、普段の地道な授業、すなわち日常生活で何を思い、どのように行動したかということもまた大切です。私たちは、小さな波によって少しずつ磨かれているのです。大きな波ばかりでは、あまりに大変で、生きる意欲が失われる可能性もあります。たいして磨かれていないようでも、庇の下の土やコンクリートが削られていくように、自分では気づかないうちに、普段の生活でも磨かれているものなのです。

キルデさんは、臨死体験を先駆的に伝え、この世とあの世の仕組み、生きる意義を伝える役割を選んだのです。

現在、YOU TUBE で、キルデさんがいろいろな話をしているのが見られます。字幕機能をオンにすれば日本語訳も見られます。

いろいろ批判もあるのかもしれませんが、エリザベス・キューブラー・ロスさんやレイモンド・ムーディさんとともに、欧米社会に、こうした問題意識を広める役割を果たしたことは、大きかったと言えるでしょう。

そしてそれは、その後のち世界規模の大きな精神的な変化を導くものであったと言えるでしょう。20世紀から21世紀にかけて起こった変化を導いたものが、一人のカリスマや、宗教や何らかの団体ではなかったということが、今後の私たちの方向性を暗示しているように思えてなりません。